氏名	仲田　みずほ			
ヨミガナ	ナカダ　ミズホ			
学位の種類	博士（音楽）			
学位記番号	博第 10 号			
学位授与年月日	2019 年 3 月 9 日			
学位論文題目	A.ソレール鍵盤ソナタの構造原理			
博士論文審査委員会	（主査）	教　授	岡田　敦子	（ピアノ）
	（副査）	准教授	藤田　　茂	（音楽学）
	（副査）	教　授	石井　克典	（ピアノ）
	（副査）	教　授	坂崎　則子	（音楽学）
	（副査）	教　授	武石　みどり	（音楽学）
	（副査）		佐藤　康太	（音楽学）
			（国立音楽大学講師）	
博士演奏等審査委員会	（主査）	教　授	岡田　敦子	（ピアノ）
	（副査）	教　授	武田　真理	（ピアノ）
	（副査）	教　授	石井　克典	（ピアノ）
	（副査）	教　授	四戸　世紀	（クラリネット）
	（副査）	教　授	釜洞　祐子	（声楽）
	（副査）	教　授	藤原　　豊	（作曲）
	（副査）	准教授	藤田　　茂	（音楽学）
	（副査）		小倉　貴久子	（古楽）
			（東京藝術大学講師）	

審査結果の要旨

1．博士論文審査委員会

日　　時	2019 年 2 月 14 日（木）　13 時 00 分～15 時 30 分
場　　所	東京音楽大学　J208
判　　定	論旨の明快さ、構成の的確さ、議論の説得力において、博士論文に要求される水準を満たしていると判定し、審査員全員一致で合格とした。
審査結果の要旨	論旨の明快さ 　本論文は、「アントニオ・ソレールの鍵盤ソナタの構造原理とは何か」という明確な問題設定を行い、形式、転調、楽節構造の３つの観点から読み解くことで、この問題に「どの鍵盤ソナタにおいても一貫して変わらない固定の原理と、鍵盤ソナタごとにソレールによってその度合いを様々に変動させられる原理」との組み合わせであるという解を与えている。「固定の原理」とは、形式における調構造の明確な領域設定、転調における「速い転調」の規則の運用、楽節構造における一貫した反復の使用であり、「変動させられる原理」とは、形式における動機の提示法であり、「速い転調」の具体的な実践法であり、楽節と動機の長短、ならびに、各動機がもつ音域とそれを響かせる奏法である。以上のように論旨は明快である。 構成の的確さ 　本論文の構成は以下の通りである。ソレールの人物像を描き出し、ソレールの創作の全体像を示す第１部（第１章、第２章）、ソレールの鍵盤ソナタの写本の状況、また、ソレールの楽譜の現在までの出版状況を整理する第２部（第３章、第４章）、そして、ソレールの鍵盤ソナタを形式、転調、楽節構造から読み解く第３部（第５章、第６章、第７章）。この構成は上記の論旨を展開するのに過不足ないものである。 　予備審査においては、各部の有機的関連（とくに第２部と第３部）の弱さが指摘されていたが、今回、提出された本論文においては、第３部で分析対象となる楽曲数が明示され、また、使用エディションも特定されたため、この点は大幅に改善された。結果、第３部における論の展開に説得力が増し、導きだされた結論の説得力も十分なものとなった。 議論の説得力 　本論文の分析は、分析対象曲のなかからもっとも音楽的なものを選び出し、豊富な譜例や分析図とともに展開している。また、本論文で展開される音楽構造上の大小の時間スケールの共存が、演奏者の身体にある「指でひく」感覚と「腕でひく」感覚に対応しているように、この分析は演奏者としての体験に裏打ちされたものであり、実際の鳴り響く音楽としてのソレールの特質を適切に表現したものである。 その他の指摘 　書式上の不備（誤字や脱字、また、用語の選定）、また、一読しては分かりにくい表現が若干、残っている。これについては、リポジトリにアップする１年後までに、論文指導教員の指導のもとに修正する。

2. 博士演奏等審査委員会

日　　時	2019 年 2 月 26 日（火）　18 時 00 分～19 時 30 分
場　　所	東京音楽大学　J スタジオ
判　　定	プログラミング、演奏ともに秀逸であり、ソレールの鍵盤音楽の理解および演奏解釈に大きく寄与するものと認め、合と判定する。
審査結果の要旨	プログラミング、演奏内容ともに卓越した博士学位申請演奏会であった。 次のような構成からなるプログラミングは、ソレールの音楽世界の様相とその位置づけを浮き上がらせただけでなく、スペイン音楽に一貫する音楽的特質、古典派音楽の地域的な広がりと多様性についても示唆を与えるものであった。 第１部 スカルラッティ、アングレス(ソレールと同年生まれ)、ソレールの作品を並べて演奏することによって、18 世紀スペインの鍵盤音楽の世界を提示し、ソレールの鍵盤作品の位置づけを確認した。 第２部 ソレールの作品をチェンバロとフォルテピアノでも演奏し、同一作品が楽器によって異なる印象となることを提示した。 第３部 ソレールの特徴である高度な演奏技巧に着目して特徴的な 6 曲のソナタを選び、その世界を堪能させた。華麗な技巧のみならず、主題提示、転調の多様さ、効果的な反復など、ソレールの作曲上の特質も演奏によって明確に示された。 第４部 プログラムの締めくくりとしてアルベニスを演奏することによって、ソレールの演奏技巧が近代スペイン音楽にも通じているという奏者の見解が示された。 上記のプログラムはコメントを含めて 80 分近く要したが、奏者のきわめて高い演奏技術と集中力、また作品を熟知していることによる構成力、音色の変化、巧みな対位法の扱いなどによって、聴衆を一瞬も飽きさせることなく、感動に満ちた演奏会となったことは審査委員全員の一致した感想である。 一回の演奏会のなかで、一人の奏者がチェンバロとフォルテピアノの演奏を加えたことも、これからのピアノ演奏の探求の可能性として評価したい。

以上